



写真-1 江井ヶ島港（令和4年3月撮影）

■ 僧・行基が開いたとされる「摂播五泊」の一つ・魚住泊と江井ヶ島港

写真-1 は、明石市大久保町江井島にある江井ヶ島港（兵庫県が管理する地方港湾）を撮ったもので、「摂播五泊（せっぱんごはく）」の一つ魚住泊（うおずみのとまり）は、この江井ヶ島港とされています。

古代から中世にかけて、海岸に沿って航行する地乗り航法（山、岬、島などを目標にして走る航法）の時代には、風や潮の流れを巧みに利用することが必要で、そのため風待ち・潮待ちをする泊の位置の選定と整備が重要でした。天平年間に僧・行基が開いたとされる東部瀬戸内海の「摂播五泊」は、瀬戸内海から明石海峡を通過して淀川河口に達するまでの間に、当時の船で1日航程の距離をおいて置かれていました。

「摂播五泊」とは、以下の泊を指します。

- ① 檀生泊（むろうのとまり）：たつの市御津町の室津港。（『ひょうご水百景』No.156 参照）
- ② 韓泊（からのとまり）：姫路市の形町。（『ひょうご水百景』No.153 参照）
- ③ 魚住泊：明石市大久保町江井島。明石海峡を東西流する潮流に対する潮待ち港であった。
- ④ 大輪田泊（おおわだのとまり）：旧湊川河口部、後の兵庫津を指す。（『ひょうご水百景』No.86 参照）
- ⑤ 河尻泊（かわじりのとまり）：淀川河口、現在の尼崎市神崎町。

■ 魚住泊の位置は赤根川河口（江井ヶ島港）と特定される

江井ヶ島港は、「上人さんの波止」と呼ばれる突堤や、港の近くにある長楽寺は僧・行基の開創と伝えられていることから、行基が開いた五泊の一つ魚住泊であるとされてきましたが、その場所については確たる証拠がなく、現・魚住港説、現・江井ヶ島港説（赤根川河口）、あるいは江井ヶ島港から約2km北西にある瀬戸川河口説などがありました。

昭和 61 (1986) 年に江井ヶ島港に隣接する赤根川の浚渫工事において、河口の海中から防波堤の基礎に使われたと思われる丸太材が引き上げられ、平成 25 (2013) 年 5 月、丸太材を放射性炭素年代測定法により測定したところ(すいぶん間延びしているが)、伐採年代が 10 世紀初頭と判定されました。

この時期は延喜 14 (914) 年に三善清行^{※1} (みよしきよゆき) が朝廷に魚住泊の修復を願い出た年代に対応することから、引き上げられた丸太材は魚住泊の修復工事が行われた際の材木である可能性が高まり、魚住泊の位置は赤根川河口とほぼ特定されました。



写真-2 「泊」と刻まれたモニュメントと由来を記した石板

また赤根川河口から東へ 250m の位置にある江井ヶ島漁業協同組合事務所南側の護岸工事の際にも井桁状に組まれた丸太材が発見されています。

さらに、平成 24 (2012) 年 9 月、丸太材が引き上げられた箇所の周辺を調査したところ、護岸に使われたと思われる石材が発見されています。

なお、港湾管理者である兵庫県は、平成 5 (1993) 年 11 月、「泊」と刻んだ魚住泊のモニュメント(写真-2)を建立するとともに、「江井島港の由来」を記した石碑(右枠参照)を設置しています。

魚住泊は、赤根川の河口に木材で基礎を造り石と土を用いて突堤を築き、船溜りをつくったのが起源と考えられていますが、『日本大百科全書』によると、海岸侵食が激しかったらしく、修築と崩壊が繰り返されていたようです。

三善清行の『意見封事十二箇条』によると、魚住泊は天平年間(729~749)の築造で、延暦(782~806)末年まで存続、弘仁年間(810~824)に崩壊、天長年間(824~834)

に修築(『類聚三代格』天長9年5月11日官符にみえる)、承和(じょうわ)(834~848)末年再崩壊、貞観(じょうがん)(859~877)初年修理開始(同貞観9年3月27日官符にもみえる)、しかし未完成とあるそうです。

その後も重源(ちゅうげん)、重聖(ちゅうせい)、性海(せいかい)らの僧が修築を行っているとか。

※1 三善清行：平安時代前期~中期の公卿・学者。4 年におよぶ地方生活を経験、この体験をもとに律令制崩壊の現状を具体的に述べ、地方政治の弛緩を論じた政策案『意見封事十二箇条』を延喜 14 (914) 年醍醐天皇に提出した。また、『延喜格式』の編纂にも関わっている。

■ 行基が開いたといわれる長楽寺

江井ヶ島港のすぐ近くにある長楽寺は、行基開基の伝承を持つ寺院です。聖武天皇の天平 16 (744) 年に行基が魚住泊を築いた時、平安を祈って地蔵尊を彫り、この寺を建てたのがはじまりだそうです。この地蔵尊は「御崎地蔵尊」と呼ばれ、土地の人からは「行基さん」「上人さん」と親しまれていて、秘仏として長楽寺本堂に安置されています。

また、長楽寺にある行基の位牌には行基の院号(戒名につける「院」のついた称号)や天平勝宝元(749)年2月と書かれた年号があり、その裏書に魚住泊の由来と、江井ヶ島の地名の由来が記されているとか。

「当嶋ならびに当寺の開基行基大菩薩は、四十五世聖武帝の天平 16 (744) 年甲の年行基この嶋に来たりて、今の地蔵尊を彫刻す。長福寺(長楽寺の末寺)の本尊なり、世に御崎地蔵尊という」

江井ヶ島港の近くで行基開基の伝承をもつ寺院は、長楽寺のほかに定善寺(じょうぜんじ)(明石市大久保町江井島)と延命寺(明石市魚住町金ヶ崎)があります。

なお、定善寺境内の井戸から出る水は酒造りに適した水質で、江戸時代から仕込水として使われてきたそうで、最盛期には五つの井戸があり、牛車が絶え間なく水を運んでいたとか。

江井島港の由来
往きめぐり
見とも飽かめや名寸隅の
船瀬の浜にしきる白波
奈良時代の初め、聖武天皇が播磨の国に來られたとき、隨行の歌人 笠金村が江井島の浜に始終白波が寄せて來る眺めを讀えた和歌です。
名寸隅の船瀬とは、江井島の赤根川河口に石椋で築島を設けた港の旧称で、その後、魚住泊と呼ばれ、播磨・摂津の五泊の一つとして重要な港湾でした。
各泊の間はそれぞれ一日の航程の距離で、僧・行基が定めたとされています。
沖合には好漁場が多く、鯛や蛸の獲れる港としてもよく知られています。
この度の物揚場築造工事で、石椋(いしぐら)に使用されていた玉石が数多く発見されたので、當時をしのび、ここに集めてモニュメントを建立しました。
平成五年十一月
兵庫県



写真-3 長楽寺



写真-4 定善寺



写真-5 延命寺



図-1 江井ヶ島港付近の地図

■ 行基が「摂播五泊」を整備した理由

『兵庫県の不思議事典』に「行基菩薩が五つの港を整備したのは本当？」とのテーマで、以下のような趣旨のことが記されています。

赤根川の河口が、奈良時代の高僧・行基の築いた魚住泊にあると地元では言い伝えられている。江井ヶ島港には、「行基大菩薩、御崎地蔵大菩薩」の石碑がある。このような伝承のなかで注目されるのが、赤根川水系に点在する行基開基の伝承をもつ寺院の存在である。延命寺が天平 12 (740) 年、長楽寺が天平 16 (744) 年、定善寺 (じょうぜんじ) が天平年間の開基となっている。これらの寺院の開基は、なぜ 740 年代となっているのか。

天平 15 (743) 年、行基は (聖武天皇が発願した) 東大寺の大仏造営勸進のための国家的事業を進めている。大仏を造るためには、山口県の長登 (ながのぼり) 銅山 (現・山口県美祿市美東町長登) で採掘した銅鉾石を大切 (おおぎり) 製錬所 (現在は遺跡) で製錬し、できあがった熟銅 (精錬銅) 73 万 9,560 斤 (≒499t) を奈良へ運ぶ必要があった。山口県で銅を船に積み込み、瀬戸内海を利用して淀川河口まで運ぶ。次いで、荷を川舟に積み替えて淀川、木津川をさかのぼって奈良・東大寺に至るのが通常考えられる運搬経路である。貴重な銅を海路で無事に運ぶためには、港湾機能を整えて船の安全を確保する必要があった。魚住泊の例からみて、「摂播五泊」は大仏造営という国家的プロジェクトに合わせて整備されたと考えられる。



写真-6 東大寺大仏殿

天平勝宝 4 (752) 年、大仏の開眼供養は行われた。

上の説は、行基が大仏造営に必要な銅を運ぶために「摂播五泊」を整備したとしていますが、記載されているのは魚住泊だけで他の 4 泊の整備時期に関する記載はなく、加えて、山口県から淀川河口までの間には、兵庫県のほかに岡山県と広島県があり、その泊地整備については残念ながら言及されていません。

『正倉院文書』の中に、造東大寺司が長門国司に対して送付した文書が残っており、これによると約 18t の銅を 20 名で、片道 20 日かけて長門から平城京まで運んだことがわかるそうです。兵庫県内で 5 日泊まるとして、残りの 15 日はどうしたのでしょうか。

瀬戸内海のほぼ中央に位置し、潮の分かれ目となる鞆の浦（広島県福山市）には、かつて潮の満ち引きを待つ船が数多く集い、「潮待ちの港」として栄えました。瀬戸内海では 1 日に 2 回の干満があり、6 時間毎に潮流が逆転します。

船は、沖合でぶつかる満ち潮に乗って鞆の港へ入り、引き潮に乗って再び船出します。潮待ちとは、潮流を利用して航行する船が潮流の向きが変わるのを待つことで、一定の距離毎に潮待ちの港ができています。

瀬戸内海を東西に結ぶ地乗り航路の風待ち・潮待ち港として、尾道や鞆の浦、笠岡、下津井、牛窓などの港町が栄えていましたが、尾道に行基の創建と伝えられる西園寺がある程度で、これらの泊地整備に行基が関わったとの話は出てきませんでした。

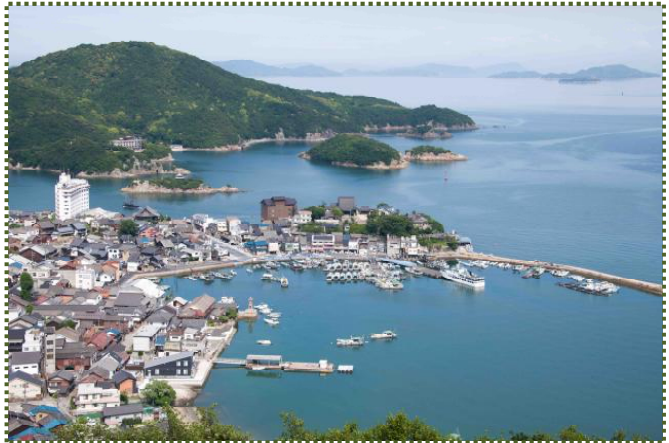


写真-7 医王寺太子殿から鞆の浦を撮影

■ モノローグ

中世の瀬戸内海は、海岸沿いを航行する地乗り航法が盛んでしたが、近世になると木綿帆の普及など造船・航海技術の発達により沖乗り航法が主流となり、寛文 12 (1672) 年、河村瑞賢 (すいけん) による西廻りの航路の開発の結果、日本海と大坂・江戸の間では、瀬戸内海を通して物資が大量に流通することとなります。

その瀬戸内海ですが、第 6 管区海上保安本部の資料によると、瀬戸内海では、最も潮流の速いのが鳴門海峡で 10.5 ノット (≒19.4km/h)、次いで来島海峡で 10.3 ノット (≒19.1km/h)、近場の明石海峡では 6.7 ノット (≒12.4km/h) となっています。当時の船では、この速い潮流に太刀打ちすることができず、上げ潮や下げ潮を待つための潮待ち港が必要だったわけです。強い季節風や暴風雨を避けつつ、順風を待つための風待ち港と併せ、潮の流れや風向きをうまく見ながら当時の船は航行していました。

それら帆船時代の寄港地も、蒸気船や機帆船の登場、あるいは明治 20 年代の山陽鉄道の開業などにより、徐々に衰退していったようです。



写真-8 大鳴門橋と鳴門海峡



写真-9 来島海峡大橋と来島海峡
(亀老山展望台から)



写真-10 明石海峡大橋と明石海峡

ソテツ（蘇鉄）

ソテツ科ソテツ属の常緑低木。木が弱った時に株元に釘を打ち込んだり根に金くすをやったりすると樹勢が回復する、という中国の言い伝えから名づけられた。ソテツは1億5千万年以上前のジュラ紀に全盛を極め、地球上に繁茂していたようで化石が多く残っている。ソテツの種子は有毒だが、幹や種子にはデンプンが含まれるため、皮をはいて時間をかけて十分に水にさらし発酵させ、乾燥させて処理をすれば食用になる。ただし毒抜きが不十分だと死にいたる危険があり本来は食用に適さない。日当たりがよいと引きしまった力強い樹形になるが、日陰では葉が間延びする。強風や潮風によく耐え、大気汚染にもかなり耐性がある。



写真-11 長楽寺本堂横の見事なソテツ

【参考資料】

- 1 『古代港津の歴史地理学的考察』 千田 稔
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/237968/1/shirin_053_1_55.pdf
- 2 『魚住泊の位置と年代～国立歴史民俗博物館研究報告・第190集』 春成秀爾・工藤雄一郎・稲原昭嘉 平成27年1月
- 3 『魚住泊、泊』 世界大百科事典
- 4 『江井島の史跡（長楽寺・定善寺・延命寺）』 江井島まちづくり協議会 HP
<https://eigashima.net/category/spot/culture>
- 5 『三善清行』 朝日本歴史人物事典・百科事典マイペディア・ブリタニカ国際大百科事典
- 6 『江井ヶ島港、長登銅山、行基』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
- 7 『兵庫県の不思議事典』 有井 基・大国正美・橘川真一 平成19年12月
- 8 『鞆の浦とは？～STORY04』 日本遺産鞆の浦魅力発信協議会 HP
<https://visittomonoura.com/history/>
- 9 『瀬戸内海の歴史』 「海之路」HP（瀬戸内・海之路ネットワーク推進協議会）
<https://uminet.jp/know/detail.php?id=22>
- 10 『忘れなぞ、ふるさとの山河～郷土史編』 中世豊後及び海部郡・郷土史研究用資料（47）
<https://bungologist.hatenablog.com/entry/2022/03/14/162045>
- 11 『西國寺』 JR おでかけネット
<https://guide.jr-odekake.net/spot/699>
- 12 『ソテツ』 LOVEGREEN 植物図鑑
<https://lovegreen.net/library/palm/p88955/>

※発行：令和4（2022）年7月 『ひょうご水百景』 No.152

改訂：令和8（2026）年7月 『ひょうご水百景』 No.152